
童話好きの殺人鬼

嘉川 綾人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

童話好きの殺人鬼

【Nコード】

N60070

【作者名】

嘉川 綾人

【あらすじ】

世には「童話」がたくさんある。

白雪姫、三匹の子ぶた、北風と太陽、桃太郎・・・etc

ある男は、童話が好きだった。

それは歪んだ過去と混ざり合い、犯罪を生む…

月夜に起きた一件の殺人事件。

それを捜査するのはとある刑事とその部下。

その二人もまた、重いものを背負っていた。

プロローグ

とある月夜、とある公園、園内の池に沿った散歩道を黒いコートにニット帽、ズボンも黒の男が通りかかる。そのすぐ側には30代半ばであるう女性がベンチに腰掛けている。何をするわけでもなくぼーっと池を眺めており、男のことなど気にもしていない。それはおろか、気づいてすらいないのかもしれない。しかし男の方は、しっかりとその女性の方を向いている。彼の脳裏に忘れようとしていた記憶が甦る。20年…その月日は、残酷なそれを消し去るにはまだ足りなかった。

男は足音と気配を出来る限り消して女性に近づく。決して知り合いの女性ではない。面識すらない。それでも男の歩みが止まることはない。やがて女性の横にまで足を運ぶ。それでもまだ女性は反応しない。男はその場で深呼吸をした。ゆっくりと息をすい、ゆっくりと吐き出す。深々と腰掛けているその女性は逃げ出せないであろう。それをもう一度確認すると手袋をしっかりとめ直す。犯罪を犯すために持ってきたわけではない。本当なら今頃家に帰っていたであろう。だが不意に、思い出してしまった。あの頃を…

行動に移るまでは随分かったが、殺人という行為自体には時間はかからなかった。一気に首を締めて、そのまま体重をかける。女性はあることに驚きつつも、首を締められ声も出せずに振り払おうとしたが酸素が足りずに手が動かず、やがて動かなくなった。

女性は死体になった。だが、男はそのことに恐怖を感じつつも同時に感動も感じていた。静かに死体の横に座る。そしてポケットから簡素なブックカバーに閉じられた本を取り出して開く。

「昔々あるところに…」

夜の静寂の中、男は一人で本を音読し始めた。否、読み聞かせているのだ。息を引き取った横の女性に向けて。

前編 - グリム -

「寒くなってきたな……」

俺はパトカーの中、一人何気なく呟いた。ここ最近一気に寒くなってきた。クリスマスも丁度2週間後と近くなり、雪の季節といえはそうなんだが、やっぱり寒さつてのは仕事の弊害にしかない。子どもがいくら喜んで、大人の俺達は何も嬉しくなどないだろう。「ここです。」

運転席から感情のこもらない声が聞こえる。警察署の奴らはみんなこうだ。このところは事件が立て込んでいるということもあるだろうが、やっぱり全員機械みたく動くようになってしまっている。そのほうが楽なのかもしれないが、こういった奴らがどうも好きになれない。

俺はドアを開けて車から降りる。場所は公園。市内でも中々有名な場所だが、やはり時期だけに人は少なく寂れているようにも見える。一件平和に見えるこの場所でも、この状況じゃ事件が起きてもおかしくはないのかもしれない。寒さも堪えるのでそのまま小走りで殺人現場へと向かう。

「弓原さん、お疲れ様です」

近づくにつれて警察官の数も増えていく。軽く返事をして進んでいくと、どうやら場所は池の前のベンチらしい。遺体を見る行為ってのは何度体験しても慣れるものじゃないが、ベンチの正面へと歩いて行くと、そこには30代くらいの女性がベンチに寝転がるようにして死んでいた。

「身元の確認はすんでいます。この女性は『タカハラ 高原 モトコ 元子』：34歳の主婦です。死因は頸部圧迫による窒息死、恐らく絞殺だと思われるます」

俺の横で長々と状況を報告している男の名は「ナカムラ 中村 ユウジロウ 優二郎」。俺の部下の一人だ。といっても、部下なんて呼べるのはこいつくら

いしかないが。

「おうおう、説明ありがとよ。それはわかったが…なんか妙じゃないか？うん？」

俺は手帳を覗いている中村の首をつかんで、遺体のほうを向けさせる。

「や、やめてくださいよ！」

中村は目をそらそうとしたが、異変に気づき遺体をじっと見つめる。確かに、と言いたそうな顔だ。

「弓原さん…どういうことです…？これは…」

不思議そうにする中村が質問してくるが、こんなことは俺にもよくわからない。

「ホトケさんの表情が柔らかい。絞殺してからすぐに手入れしたんだろう…一刻も早く現場から離れたいであろうホシは、ここで時間かけて表情を直してたってことだ。」

「そんなことって…」

中村が何か言おうとした途端、ベンチの下、俺の目にふと何かが写った。俺は中村を静止させて、手袋をして目に写ったもとる。どうやら紙切れのようだ。折ってたたんであるそれを開く。

「『異端の者は大きく羽ばたく』…？」

メモ帳のようなその紙には鉛筆かシャープペンシルで簡単に殴り書きされたような文字で、「異端の者は大きく羽ばたく」と大きく書かれていた。俺も中村も首を傾げる。

「どういうことでしょうね…弓原さん…」

「何のことかわからんが、聖書かなんかの一節だろ…ご丁寧に証拠を残してくれるってことは…」

俺は深くため息をついて舌打ちをして続けた。

「挑発してきてる自信家か、もしくはイカれたサイコ野郎だな」

遺族の意向で司法解剖はなし。高原元子についてはそのまま葬式

が行われるようだ。あれから2日たつが事件の進歩は全くない。第一発見者だった青年のアリバイも証明された。そして、ガイシャの「高原元子」は人に恨まれているような事実もなく、ホシとの接点も見つからない。しかも事件の目撃証言は殆ど無い。というのも、あの日はここ数日の中でもかなり寒い日だった上、死亡推定時刻は夜中の1時。そんな時間にガイシャもホシも外に出ていたのが不思議なくらいなのだ。挙句の果てに、謎の怪文「異端のく」というのは現在調査中なものの、怪しいところはしらみ潰しに探したので見つかる目処もたたない…そうしても今日も終わってしまった。

俺はコンビニで夜食の買い物を終え、自分の部署への帰路についてた。その時ポケットの携帯が鳴り響く。事件のことを考えていたため、びっくりして急いでケータイの通話ボタンを押すと、それと同時に中村の声が聞こえた。

「弓原さん！今どこですか！大変です、また事件が発生しました！」

平穩も束の間、俺はすぐに中村に車を頼み、来た車が止まるった直後に助手席へと乗り込んだ。するとそれを待つかどうかですぐに車は出発して現場へと向かう。

「ほれ、夜食だ。食え」

俺はコンビニで買ったおにぎりを運転席の中村に投げた。

「ありがとうございます。もう食ってきたんですけど」

中村は苦笑しつつ渡したおにぎりのカバーを外して啜えた。俺はタバコを取り出そうとして…ふと横の中村を見る。

「すまんすまん…駄目だっけな、タバコ」

俺の言葉に中村はぺこり、と頭をさげるようにして応じておにぎりを飲み込んだ。

「あんまりいい思い出がなくて…すみません」

少し申し訳なさそうに中村は苦笑しながら言ってくる。

…中村には両親がいない。まだ物心もない頃に離婚した上に、父親母親共に引き取らず、親戚の家に預けられることになった。しかし、その家の親父はかなりの酒好きタバコ好きで、しかも虐待の日々が続いたという。その頃のトラウマからか、タバコは好きになるどころか全く受け付けない、らしい。

俺は慌ててタバコをポケットにしまった。代わりにもう一個のおにぎりを食べながら現場への到着を待った。

事件が起きたのはこの前の公園から少し離れた、人影の少ない果樹園だった。第一発見者は果樹園の地主。飼い犬がやたらと吠えるので木の影に人影があったというので声をかけたら既に死んでいたという。本来なら第一発見者から疑うのが筋だが、今回はそういうわけにはいかない。なぜなら、また例の怪文書が見つかったのだ。

「『100年後の茨の中には衰えぬ愛』…？」

中村が音読すると、捜査員一同、皆首をかしげた。

「どういうことだ…？」

「100年後…？何の話だ…？」

意味の分からない文書にざわめく。勿論俺も理解出来ない。一体何のことを言っているのか…？殺されたガイシャと文書、何か共通するものがあるのだろうか？

「前回の言葉の解読も終わってない…が、こっちの捜査をサボるわけにもいかない。殺し方や文書を残す犯罪パターンからして、やっぱりホシは同一人物だろう。証拠は増えた！洗い出すぞ！」

俺が皆に言い伝えると士気があがったようで、全員頷いて四方に散らばった。

しかし発見からは残念ながら時間がたっており、（犬が吠えたのはガイシャを襲っていた犯人ではなく、月明かりに照らされた死んだあとの被害者に、ということだったらしい）今更ここ一体に捜査網を敷くわけにはいかないので、結局当たり周辺の捜査というこ

とになり、それらしい証拠品は見つからなかった。そこまで練られた計画的殺人とは思えないものの、やはり季節が影響してか、中々人から情報が得られない。そういった悪条件も重なり、やはり大した情報はまとまらない。

今回の事件の被害者は『沖^{おき} 茂^{しげる}』32歳の男性会社員だった。前回と同じく司法解剖も拒否されたためできず、捜査はそこまでとなつた。

三日間で二件起きた事件、つまりこれは連続殺人事件となつてしまった。殺人を抑制することができなかったのは悔しいが、この調子だとまたどこかで起きる気がしてならない。

「弓原さん、これ」

最初の事件から三日目の昼、度重なる捜査をちよいと抜けて、中村と共に喫茶店に足を運んでいた。

「ありがとよ」

中村が運んできたコーヒーを受け取りテーブルに置く。窓の外は既にどこもかしこもクリスマスの雰囲気が出ち込めている。今は2週間だが、特に早いってことはないだろう…、なんてどうでもいいことを考えていると、中村がまた俺の名前を呼ぶ。

「弓原さん、そろそろクリスマスですねー」

俺は軽く頷いた。外のサンタクロースを見れば嫌でも思い知らされる。

「ご家族といっしょにいらなくて…いいんですか？」

中村の言葉に、一瞬ドキっとし、冷や汗が出る。家族…そう。俺には家族がいる。妻に男の子が一人、まだ小学生だ。しかし職業柄、どうしても家に帰る頻度が低く全く接していない。最後にともに会話したのは三ヶ月くらい前だったのではないだろうか…

「はは…事件がなんもなければ帰ってたんだがな…」

俺の言葉に中村も目を伏せて、自分のコーヒーを覗き込む。

きつと、事件がなくても俺は家には帰らないだろう。妻ともうまくいってない。子どもがまだ小さいからという理由でお互い離婚を避けているだけで、子どもがいなかったらきつともう分かれているだろう。そのことを中村もなんとなく感づいてるから、気を効かせてきつかけをくれているんだろうが、そう簡単に修正できる問題でもない…ましてやクリスマスだからってどうにかなるものでもない…俺はいつもそう自分に言い聞かせている。

それから数日…正確には5日過ぎた。最初の事件発生からは9日だ。被害者二人の関連性も全く見つけられず捜査は完全に行き詰っていた。…そんな9日目の夜、3件目の事件が起きた。

場所は市内の有名なマラソンコースの一角。賑わっている通りから少し離れている場所で殺害されており、目撃証言にも期待できそうにない。

「それでも、どうやらこの地理に詳しい人間のような…相変わらず人の少ない所を突いてきます」

中村が凍える手に息を吹きかけながら俺に言ってくる。それは一つの犯人像への手がかりの一つだが、やっぱり手がかりが少なすぎる。こんな捜査を続けていても、絶対に犯人には追いつけない。

俺は悪態をついて空を見上げた。今日も月が綺麗だ。あんな風に悩みを何もなくて空に浮いていたら…そう、この事件の件だけじゃなく…

月に見とれていた俺に中村が紙切れをもって駆け寄ってきた。

「弓原さん、またですよ…怪文書！」

俺は首を左右に揺すって意識を持ち直して、紙を覗き見る。そこには『愚かな強者は賢い弱者に追いつけず』と書いてあった。

「全く文章に一貫性がない…一体何のことを言ってるんだ？」

答えのない問題を考えるのに疲れ、思わず髪をくしゃくしゃと掻いてしまう。すると、中村が神妙な面持ちで紙とにらみ合いをしている。

「どうした…犯人の顔でも浮かんできたか？」

俺が皮肉を述べると、「いえ」と冷たく返された。やれやれ、と俺がため息をこぼそうと思うと、「ただ…」と続ける。

「どうも…この文、見覚えがあるんです」

犯人が何かを記した文字列に見覚え…？俺は突拍子も無い中村の発言に思わず苦笑してしまった。目星のつく本は徹底的に洗ったのだ。そこになかった文章をたまたま中村が知っているとは考えづらい。

「あんだだけ本を見漁ったしな…記憶が被ってるんだろ？これはただの犯人の創作…」

「昔読んだ…」

俺の説得など耳に入っていない様子で、ひとりでに喋っている。

これには俺も妙に思い耳を傾け、口を閉じた。

「うさぎは…昼寝をしてしまいました。すると、うさぎが起きた頃には、いつの間にか競争相手のかめはゴールにたどり着いていました…」

中村の語りと紙切れの文章が一瞬にして一致した気がした。

「うさぎとかめ…か」

信じられないものの、中村にたずねるとゆっくりと頷く。

「この殺人鬼…童話を紙切れに残していたのか…」

謎が解けた気がして、全身の力が抜けそうになる。

「まるで…童話作家…」

中村が紙を見ながらぼそ、と呟く。

「グリム…か…」

まだ子どもが小さい頃に読み聞かせた童話が、ふ、と脳裏に浮か

んだ気がした。

前編・グリム・（後書き）

童話好きの殺人鬼、本編の中の前編です。

中盤、ちよつとグダグダになってしまいました、

そこもラストへの伏線…になると思うので、ぜひ読んでみてください！

後編・プレゼント・

「『異端の者は大きく羽ばたく』…これは…」

俺達は部署に帰ってきて、早速今までの文書の解読に勤しむことにした。総勢10名ほどで、一つの文書につき思いつく童話の名前を出していく。

「恐らく『みにくいアヒルの子』、では？最後に白鳥になって飛んでいくっていう」

全員片手にはコーヒーを持ち、連日の疲れと眠気を追い払いながら作業しているわけだが、それでも中村が思いつくのが早く、俺達はどうにも思いつくのに一步遅れている。むしろ中村が一步先を行っているのだろう。

「よく思いつくね…」

紙に書きながら仲間の一人が苦笑しながら呟いた。

それに大して中村は、

「子どもの頃、よく読んでましたから。童話」

と、微笑んで返答する。しかし中村の過去を考えれば、それは楽しい記憶じゃなく寂しい記憶なのだろう。それを考えると、中村の表情もどこか淋しげに見えた。

「じゃあ次の文書の…」

中村の活躍あって、どうにか文書の解読はまとまった。

『異端の者は大きく羽ばたく』というのは、『みにくいアヒルの子』。

『100年後の茨の中には衰えぬ愛』というのは『眠れる森の美女』。

『愚かな強者は賢い弱者に追いつけず』は『うさぎとかめ』。

だがそれでも接点は童話、ということのみで、童話好きの殺人鬼

という手がかりしか手に入らない。(その影響で、通称「グリム」
と呼ばれるようにはなったが)おまけに今回のガイシャの井上徹イノウエ トオル
という30代男性と、今までのガイシャとの接点もまるで見受けら
れない。

「つまるところ、夜に絞殺され、現場に童話のあらすじを濁して
残す、ってことくらいしか共通点はないわけか」

そう言ってコーヒーを飲もうとすると、中村が付け加えてきた。

「あともう一点。犯罪の起きた夜は決まって月が出ています」

「月、ねえ…」

俺は窓の外で暗い空にポツンと浮かぶ月をチラリと見て、一人笑
った。

謎は解けぬまま警察仲間もパラパラと帰り始め、部署には俺と中
村と数人しかいなくなってしまった。しかも、いよいよコーヒーで
は追い払えぬ眠気も意識を朦朧とさせて、うとうとしてくる。

「まるで、子どもみたいです、犯人のグリム」

中村の声で我に帰り、「そうだな」と言葉を返す。

「もしかしたら犯人は誰かに構って欲しいのかも…」

その言葉に俺が首を傾げると、中村はさらに続けた。

「普通だったら手がかりなんて残さない。弓原さんが最初に言っ
たように、挑戦状のつもりか、それとも頭がおかしいのか…でも、
そうじゃないとしたら。純粹に誰かに読んでもらいたいと思ってい
ただけなら…」

意味深な言い回しは寝ぼけている頭で理解するには時間がかかっ
た。俺は残り少ないコーヒーを飲み干す。

「仮にそうなら、グリムの野郎は遊び感覚でやってるのかもしれ
ない。そうだとしたら、尚更早急に捕まえなきゃいけないな」

俺は髪をかきあげ、頭を左右に振って眠気を飛ばそうとした。し
かしどうにも目が冷めないため、俺はトイレに行こうと席を立つ。

「ちよいと顔洗ってくるわ」

その言葉に中村は会釈程度に頷き、また一人考え始めた。

「誰も童話を一緒に読んでくれなかった…」

俺は中村の独り言のような声を無視して扉をあけてトイレに向かった。

トイレは換気のために窓が空いており、外の空気が入り込んでおり非常に寒い。俺は凍えてしまつ前に早々に出ようと蛇口をひねり、手に冷水をためて顔を洗う。

そういえばしばらく息子にも本を読んでいない。少し前…いやかなり前までは日課だったはずなのに。クリスマスも帰宅の予定をしていない。息子はどんな気分か考えたことすらなかった。俺が家にいないことで、直接俺に怒ったり泣いたりすることすらできない。それどころか、妻も家にはあまりいない。あいつは…一体誰に本を読んでもらえばいいんだろうか。

「グリム…お前は一体何者なんだ…どうしてこうも…」

続く一言は思わず涙ぐんだ声がトイレに響いた。

「胸が痛むんだ…」

気持ちを立てなおして部屋に戻ると、中村が一人でキーボードを叩いていた。

「どうした、なんか閃いたのか？」

俺の声でもどつてきたのに気がついたらしく、突然の声にちよつと驚いた仕草をしたが、すぐにメモをさし出してきた。

「やはりグリムは、無差別に殺人を行っているとは思えません。

人のいない時間帯、警察にすら見つかりにくい場所を選んでいるのに、突発的な殺人を連続して起こしているとは考えにくいからです」

「つまり、何か規則性をもっていると？」

この言葉に中村はゆっくりと頷いた。

「はい。恐らく、何かの本に従っているのではないのでしょうか？
童話を集めたような…」

パソコンの画面にはネット販売サイトの本のページが開かれている。

「確かにそれを証明できれば次の犯罪の手がかりになるな」

中村は「なので」とパソコンの方へ向き直した。

「その方向で調査してみませんか？」

ようやく事件に進展が起きそうな気がしてきた。俺は中村の肩を叩いて、自分のデスクのパソコンをすぐに起動した。

外から太陽の光が差し込む。小鳥も囀るいい天気だが、気分は重い。推理まではよかったが、肝心の本が見つからない。

「朝か…仕方ない。中村、お前はそのままパソコンで調べろ。俺は街の本屋に直接聞き込みをしてくる」

中村は疲れた表情をしているが頷いてくれた。その場は中村に任せて俺はコートを羽織り、駐車場まで走っていった。

「『みにくいアヒルの子』『眠れる森の美女』『うさぎとかめ』

これらが書かれている本つてのは取り扱ってないか？」

昼過ぎ、俺はいよいよ5件目となる本屋に足を運んでいた。ここまでの4件は全滅。しかし探すのに時間がかかるため、思ったより1件1件で足止めを喰らい時間がかかる。

「うーん…少々お待ちください。探してみます」

ここもまた同じ返答。期待はできない。俺は腕時計で時間を確認する。ここまでの統計上の話だが、「月夜」のみの犯罪というのも否定出来ない。この前までは雲がかかっておりあまり天気がよくなく、犯罪の日にちに間が空いていたが今日は快晴だ。恐らく夜も綺麗な月が拝めるだろう。つまり犯罪が起きるかもしれないのだ。それまでに手がかりになるかもしれない「本」を見つけないと、また犯罪を許してしまう。

「すみません、刑事さん。当店には置いていないようです」

その言葉を聞くと俺は深い溜息をついた。ここは市内でもそこそこ大きい本屋で、ここにもないとなると他の店で期待ができないのだ。そんな落ち込んでいる俺の様子を見かねてか、店員が話を続けた。

「ただ、その話見覚えがあるような気がします。ただの憶測なので正確ではありませんが、確か『童話全集』と言ったような本の内容だったような…」

その言葉に反応して、俺は慌ててメモ帳を取り出して記帳する。

「『童話全集』だな？」

「正確な名前じゃないと思うけど…確かそんなような名前で、数巻出てた内の1巻だと思います」

俺の問いかけに自信なさそうに答えてくれたものの、それでも充分な手がかりだ。俺は礼を言っすぐに車に乗り込んだ。

中村に連絡をとったが、『童話全集』は依然見つからずもう随分と日も暮れてしまった。あと2時間程度で真っ暗だろう。俺は車の中ハンドルを握りながら次はどの本屋へ向かうべきか考えていた。

「恐らく昔の本なのだろう…それを取り扱っている店…」

市から少しはみ出すが、ふと心当たりがある店を思い出した。

「行ってみるか…」

俺はハンドルをそのまま右に切って、交差点のギリギリのところまで右折して道に入り、その店へと向かった。

「おお、弓原さん。お久しぶりですな」

そこは小さな昔ながらの本屋。店主は小村という70代くらいの老人。以前はよく利用していたが、ここ最近はめっきり来なくなっていた。

「覚えててくれましたか」

俺は微笑して、早速手短に要件を話すと小村さんはダンボールを開けて中身を調べ始めた。

「確か『新童話集 - ?』というタイトルだったはずです」

小村さんの言葉には驚いた。もう昔の本だろうし、まだ若い本屋の店員ですら忘れていたのだ。

「よく覚えてますね」

本を探している小村さんの背中に向かって言うと、笑いながら言葉が帰ってきた。

「職業柄でしてね。一度取り扱った本は中々忘れないんですよ」
なるほど、と納得して俺は頷いた。

「なあ、小村さん…親から愛情を受けられなかった子どもはどう成長すると思います？」

俺はふと頭に浮かんだ質問を口にした。すると小村さんは探す手を止めてきよんとする当然の態度を示したが、すぐに作業を再開し、やがて口を開く。

「子どもというのは、親から愛されながら育っていくものだと思います。愛されることで初めて人間として大きく成長していく…もしその愛がなかったなら、体だけ大きくなって、心は幼稚なまま。子どものように幼い大人になるんじゃないでしょうか？」

意外にも「なぜ」とは聞いてこずに俺の質問にだけ答えてくれた。

幼い大人…俺は頭の中で妙にその言葉がひっかかった。中村の言っていた言葉とまるで同じだ。

「ありました。これじゃないですか？」

グリムについて考えていたところに、不意に小村さんの声がかかる。ふと見ると手には『新童話集 - ?』と書かれた本が握られている。

「おお、多分これです！開けてくれますか？」

小村さんは商業用のカッターで手際よくビニールをはがして本を渡してくれた。俺は年季の入った表紙をめくり、目次の欄を見る。

「みにくいアヒルの子…眠れる森の美女…うさぎとかめ…」

「次はヘンゼルとグレーテル…ですか」

前回の犯罪の『うさぎとかめ』の次は『ヘンゼルとグレーテル』
になっていた。俺はじつと目次を見つめる。ヘンゼルとグレーテル
…一体どこだ？犯罪はどこで起きる…？

ケータイの着信音がズボンのポケットから鳴り響く。まさか、と
思いつつも、本をカウンターに置いて店の外に出て電話に出る。

「弓原さん！今度は昨日のマラソンロードから一本入った通りで
…！」

「事件か…」

俺はちら、と腕時計を見た。時間はまだ0時前だ。いつもより明
らかに早い。しかもまだ人もそこそこ出歩いているだろう。

「中村…どう思う？」

月を見上げながら息をつく。息は白くなって消える。それと同時
に中村からも返事が帰ってきた。

「恐らくグリムの奴、俺達が文書の謎を解読したのを察知したん
でしょうね」

思っていたことと同じ回答。きっとそうなのだろう。

「…俺もすぐに向かう」

「小村さん、どうもありがとう」

俺はカウンターに置いてある本を受け取って代金を支払った。小
村さんはいらないと言ってくれたが、これは正式な証拠じゃなく、
俺と中村で勝手にやってることなので強引に受け取ってもらった。

「じゃあ、またよろしく」

そう一言残し店内を出ようとすると、小村さんが声をかけてきた。
「どうかお気をつけて。その犯人…どうか助けてあげてください」
少し沈黙し、ゆっくり俺は頷いた。

『帰り道は蜜のように甘い』

現場に残された犯人による文書。ただ今回は殴り書きのように急いで書いた感じがかもし出されており、殺された50代前後と見られるの男性の表情もいつものように柔らかくはない。やはりグリムの焦りというのが分かる。

殺された場所は、大通りより一本入った小道のお菓子屋の真正面だ。おそらく次の物語『ヘンゼルとグレーテル』の魔女のお菓子の家を考えての犯行だろう。

「どうです、手がかりは見つかりましたか？」

殺人現場に到着すると中村が駆け寄ってきた。俺は車の中から『新童話集 - ?』を取り出して目次の欄を見せる。

「『ヘンゼルとグレーテル』…なるほど今回の犯行はこれですね」「情報を手に入れるのがもう少し早ければな…」

中村は俺から本をとって、ペラペラとめくり始める。

「今度は『シンデレラ』だ。急いで場所を特定しなきゃならんな」「弓原さん、その件なんです…」

夜は開けた。久しぶりに俺は自分の部屋（といっても寮だが）のベッドで寝た気がする。疲れが溜まっていてか、起きたらもう昼過ぎであつた。俺はのんびりシャワーを浴びて私服に着替える。

本の第一版は約20年前だ。そしてこの本をモチーフにして犯罪を犯してるグリムの年齢はその20年+4、5、6、と言ったところだろう。つまり、20代半ばから後半くらいの奴が怪しいというわけだ。そして次の犯罪の場所は…

「次の犯罪は時計塔で起こると思います」

昨日の夜、「場所を特定しなければ」という俺に、中村はまた面白い推理をしてきた。

「なぜそう言い切れる？」

「犯罪が起きた場所は市内の公園から、ほぼまっすぐに時計塔に向かっているのです」

確かに地図に記していけば分かることなのだが見逃していた。たどっていくと確かに時計塔にたどり着くのだ。

「シンデレラの魔法は0時に解けます。それを考えると…」

俺は簡単な朝飯：いや、昼飯を作った。食パンとベーコンだ。これもまた久々のまともな食事だ。午後の太陽の光がカーテンからかすかにかかる。

時計塔の警備は通常はほとんどいない。そして今日も一見ほとんどいないように見えるようにしてある。だが、そこには何人かの刑事が交代で1つしかない入り口を見張っている。これは犯罪防止のキャンペーンではなく、犯人逮捕のための行動だ。つまり威嚇せずにスキをみせてそこで捕まえる他ない。そして俺が行くのは一番犯罪の可能性が高い0時頃。

小村さんは「助けてあげてください」と言っていた。それに対して俺は頷いた。だがはつきり言って、何をどうしたらいいのかは全くわからない。ただ今は逮捕しなければいけないという気持ちがあるだけだ。この気持ちを強く持たなければ…ヘタをしたら俺は取り逃がしてしまうかもしれない。…この期に及んで、俺の中ではグリムが俺の息子とダブって見えてしまう。歳は全然違うが、推測するに環境がすごく似ている。

親の愛情を受けられなかった子どもは、幼いまま大きくなってゆく。そんな小村さんの考えや、中村のグリムの犯人像は深く俺の心に突き刺さっている。

俺にグリムを逮捕する資格はあるのだろうか…

ケータイのアラームが鳴る。23時の合図だ。コートを来て、使うことにならないよう祈りながら銃をポケットにしまった。部屋を出て駐車場に向かうと、丁度中村も来ていた。

「行きますか」

「最後にしよう。気合入れていこう」

俺達は車に乗り込み、次の発生現場であろう時計塔へと車を急ぎで走らせた。

今日の夜空はすごく綺麗だ。空気が澄んでいるためか満点の星空が広がっている。勿論月もいつもにまして輝いている。

暗くなっていく街並みの中に一つ、大きく飛び出してる塔がある。それが国内でも有数の時計塔だ。時計塔の近くに車を止めて、見張りの仲間に現状を聞く。

「弓原さん。怪しい人影は全くないです。もしかしたら感づかれたのかもしれませんが…」

見張りの刑事が不安そうに言ってきたので、俺は交代とのことを伝えて今度は中村と見張りをすることにした。

「中村…」

木の影からさりげなく時計塔の入り口を見張っている。まだ辺りに人影もなく、異変も起きていない。俺は重い口を開いた。

「なんです？」

中村はきょとんとしている。

「ここに来るまでずっと考えていたんだが、もしかしたら俺はグリムを捕まえられないかもしれない」

俺の言葉に中村は驚いたような表情を見せた。

「やっぱり…グリムは俺の息子みたいに思える。全く親の愛情を受けずに育った子ども…それがグリムなのかもしれない。すると奴はお前の言ったとおり、子どものように幼い大人になってしまった

のだろう。そんなグリムを俺に捕まえる資格があるのかどうか…」

深い溜息のあと、沈黙が続く。

「駄目ですよ。逃げちゃあ」

その沈黙を破ったのは、中村のこの言葉だった。

「グリムはそうした寂しい青年なのかもしれません。でも仮にそうだとしたら逆に逮捕しなきゃならない。誰かが愛情を持って叱らなきゃならない。今その役目を担うのは、誰がなんと言おうと弓原さんなんです」

中村の声に俺はしばらくの間何も言えなかった。

「俺も昔非行に走ったことがあります。でもその時、ちゃんと俺のことを考えて怒ってくれる人がいたから、俺は立ち直れたんです。…親戚には自分の都合で怒られたことしかなかったから、あの時の叱りはすごく感動したのを今でも覚えています。だから…」

俺は力なく笑った。

「部下に説教されるとはな…」

そんな俺を見て、中村も微笑む。

「知ってました。弓原さんが今回の件で家族と重ねあわせて悩んでいたの。お願いですからクリスマス、帰ってあげてください。それが弓原さんのこの事件最後の仕事ですよ」

中村のセリフに俺が礼を言おうとしたその時、時計塔内から甲高い悲鳴が辺りに響く。俺は中村と目を合わせると、即座に時計塔に走りこんだ。

時計塔内は複雑な道はない。ただ階段を駆け上がるだけだ。そんなに現実離れた高さではない。てっぺんにグリムがいるにしてもまだ間に合う。時計はその時55分を指していた。

途中から息切れがしてくる。数年前なら余裕だったのかもしれないが、やはり不規則な生活に運動不足が重なると、やはり体力は格段と落ちているようだ。しかし、俺にはやらなきゃならない仕事がある。

ある。グリムを捕まえて、家に帰るんだ。俺は息切れして感覚の消えてきた足を前に前に伸ばし、必死の思いで走り続けた。

「いいかい？ここに座るんだ…」

見知らぬ青年の声が聞こえる。俺は最後の踊り場までたどり着いた。ゆっくりと一段一段登っていく。

「やめて！あなた誰なの！？」

もう一人は若い女性のようだ。中村を確認しようとしたがもう少し下のような。俺はポケットの拳銃に手を伸ばし、即座に構える。

「動くな！警察だ！」

グリムと見られる男は全身真っ黒の服装で、俺の声に反応してこちらを見た。その目には困惑と恐怖が映し出されていた…だが、それもすぐに消える。

「やつと…やつと追いついたか…のろまな警察め…」

その声はかすかに震えているように思えた。それが恐怖からなのかそれとも武者震いなのかはわからない。

「いいか、その女性からゆっくり離れろ」

「うるさいぞ」

グリムは一向に女性から離れようとしなない。一方女性も腰が抜けしているのか、逃げきれそうにない。

「お前らのせいだ…お前ら大人のせいで僕は…」

俺はグリムに銃口を向けた方がいいが、女性から離れる気もないらしく発砲もできない。

「俺らのせい…？一体どういう事だ？」

グリムは怒りのせいかな歯ぎしりをし、語り始めた。

「僕の両親は…昔は中が良かったんだ…でも…お互い忙しくて…やがて離婚した…。それから、僕はお母さんと暮らすことになったけど…お母さんはほとんど家にいなかった…」

グリムの語りに俺は胸が締め付けられそうになった。まるで同じ

なのだ。離婚した点以外まるで俺の家庭と同じなのだ。

「それにお母さんは…機嫌が悪い時僕を殴ってきた…僕は悪くないのに…それでも、僕には宝物があったから…耐えられたんだ…」

「『新童話集』…か？」

俺が尋ねると、なぜ知ってるの？と言いたそうな顔をしたが聞いてはこなかった。

「そうだよ…『新童話集』…お金がなかったから一巻しかなかったけど…」

と、グリムはポケットから本をのぞかせる。それは確かに俺が昨日手に入れた『新童話集 - ?』と同じものだ。

「ちっちゃい頃は…まだお母さんたちの仲が良かった頃は…それを決まって月のでる夜に読み聞かせてもらったんだ…」

俺はようやく謎が解けた。犯罪が起きたのが月夜だけの理由…それは…

「だから…だから僕も月夜にしか『読み聞かせ』をしなかった…」

「読み聞かせ、つてのはお前が犯した犯罪のことか？」

その言葉にグリムは怒ったように反論してきた。

「違う！僕は！犯罪なんか犯してない！僕は…！」

グリムはしばらく息遣いを荒くし、言葉を探していたようだったが、やがて再び語り始めた。

「それでもあの夜は…公園を歩いていた夜は我慢できなかった…池を覗き込むあの女の姿が、僕のお母さんにそっくりだったんだ…だから、僕は仕返しをしてやった…」

おかしそうにグリムは笑った。

「面白いよね…読み聞かせてもらった人に、今度は僕が読み聞かせる番になったんだ…だから僕は次の人にも読み聞かせてあげることにした…」

やはりグリムは正常な状態ではない。少なくとも、まともな大人には成長出来ていない…

「わかってるだろ…こうなってるのもなにもかも、お前ら大人のせいなんだよ！体だけ大きくなって、心を肥やした醜い大人どもめ！」

俺は反論しようとしたが、ふと息子のことが思い浮かんで頭が真っ白になる。それを見計らってか、グリムは俺に向かって突進してきた。俺は悲鳴をあげて階段から転げ落ちる。丁度下の踊り場まで駆けつけていた中村にぶつかり、なんとか止まった。だが、グリムはそのまま倒れこんでいる俺達を乗り越えて、下へと下りていってしまった。

「すまん…中村…やっぱり撃てなかった…」

なんとか起き上がりながら、泣きそうな声で呟くように中村に謝る。

「らしくないですよ、弓原さん。被害者が守れたなら任務をこなしてますよ」

中村はなだめてくれたが、まだ止まるわけにはいかない。

「ありがとよ…俺も情けねえな。そのついでに、上の被害者の女性を保護しといてくれるか…間に合うかわからんが、グリム追う」

俺が服を払って立ち去ろうとすると、中村は靴音を響かせ、敬礼をしてきた。

「了解しました！お氣をつけて！」

俺はまた息を切らしながら階段を猛スピードで下りていく。グリムもまだ塔内のようなだが随分と差が開いてしまっている。しかしこのまま逃がすわけにはいかない。俺は持てる力を振り絞って前に向かって必死で走った。

塔を出ると、既にグリムの影はない。見失ったか、と意気消沈しそうになったが、ある考えがそれをやめさせた。犯罪を実行できなかったグリムは果たしてどうするだろうか？

「『新童話集』の最後の話は…」

最後の話は確か：『マツチ売りの少女』：今までずっと犯罪は一直線上で起きてきた。今更このルールを破ることはないだろう。

俺はそのルールに従って、公園から伸びる一直線上に走り始めた。

住宅街のほとんどはもう消灯しており道はかなり暗い。しかもグリムは全身黒ずくめ。ヘタをしたら見逃してしまふ。だがここでそんなヘマをするつもりはない：絶対に見つけ出す。

塔を出てから20分ほどだろうか：塔は元々市内の隅の方に作られておりもう少し進めば市外なのだが、丁度境目のところに随分と長い空き家がある。そこにグリムは入っていくのをようやく見つけた。

俺が駆け寄って扉を開けようすると鍵がかけられている。俺は扉を強く叩いた。

「おい…！…もう…逃げられないぞ…！出て来い！」

肩で息をしながらなんとか言葉をひねり出し、叫ぶ。すると意外に近く、ドアの向こう側から声が聞こえてきた。

「お前らのせいなんだ…！お前らの…！」

グリムの言葉を聞くと胸が痛む。だが、俺は決着をつけなければならぬ。

「いいか、よく聞け。そうだ。お前がこうなってしまったのは俺達大人のせいかもしれない。お前にちゃんとした愛情を与えられなかったからかもしれない。だから俺はお前を逮捕する。それがせめてもの償いのために！」

グリムは黙り込んだ。だが俺もその隙について扉を力づくで開けようとは思わなかった。するとようやく言葉が帰ってくる。

「『零の刻、鐘と共に魔法は解けゆく』」

いきなり言われると何のことかわからなかったが、どうやらこれは『シンデレラ』の文書だろう。

「『少女は暗闇、一人炎と夢をみる』」

少し時間を置いて、また聞こえてくるこの言葉は、最後の物語『マツチ売りの少女』なのだろう。

「それぞれ…最後二つの物語にあてるつもりだった文書だよ…」

「どういふつもりだ…？自首するのか？」

この俺の問いかけに対し、グリムの返事はない。

「僕はあんたの名前すら知らないし、あんたは僕の名前を知らないだろう。なのに僕は一夜目からあんたから逃げてて、あんたは一夜目から僕を追ってた…不思議だと思わない？」

俺は意味がわからずにもう一度扉を叩いた。すると奥のほうから力が抜けたような声が聞こえてきた。

「楽しかったよ、ありがとう。刑事さん」

「どういふつもりだ。もう俺は出し抜けないぞ？」

いつ出てきても対応できるように、片手には手錠を持つ。

「僕は…やっぱり寂しかった。誰かにかまってほしかったんだ…」

僕も童話を読み聞かせて欲しかった…

裏の換気窓から煙が出ていることにふと気づく。

「馬鹿野郎！ここで火を放ったのか！いいから出て来い！」

俺は慌てて扉を開こうとしたが、びくともしない。代わりにグリムの声は聞こえてくる。

「一番好きなお話は、やっぱり『うさぎとかめ』かな…その次は…」

横にも後ろにも回ったが、どこも木で打ち付けられていて、突入するのには時間がかかりすぎる。やがて、中から聞こえるグリムの声も途切れてしまった。

俺が燃ゆる家の前のベンチに腰掛けその様を見ていると、中村がようやく追いつく。

「な、なんですか、これ…」

驚く中村に俺は「グリムだ」と呟いた。

「空き家がここまで出入口を封鎖してとは思えない…どう考え

ても事前に準備してたんだろうな…そう考えると、グリムは結局ここで最後を遂げることを計画していたのだろう」

中村はしばらく放心状態で家を見ていたが、急に慌てだしてケータイを取り出した。

「消防隊ならもう呼んだぞ？」

その言葉でぴた、と動きが止まってケータイをもう一度しまい直す。

「さて、行くか」

と、俺が立ち上がると、中村は不思議そうな顔をする。

「行くって…どこへですか？」

「息子へのプレゼント買いにな。ちょっと中村、付き合えよ」

中村はため息を付いて苦笑する。

「いいですけど…今、夜中の1時ってことをお忘れなく。」

「警察の名を使えばそんなもん大したことないだろ」

小村さんの要求…グリムを救うことはできなかった。だがグリムは最初からああなることを覚悟していたのかもしれない。凍えるような寒い夜。燃える炎の中。絶命することを…俺はそれに対し、少しでも助けの手を差し伸べられたのだろうか。最後のグリムの「ありがとう」というセリフは未だに心に残っている。

そして…今年は妻に、息子に会ったために…俺は俺の意志で家に帰ることができるそうだ。

END

後編・プレゼント・（後書き）

いかがだったでしょうか。

たまたま生まれた作品だったのですが、

自分なりに結構こね回して作ってみました。

是非ご感想などいただければ有難い限りです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6007o/>

童話好きの殺人鬼

2010年11月2日16時09分発行